

アツヴィ、RSウイルス感染症で入院したことのある子どもの親を対象に「RSウイルス感染症重症化による入院実態・意識調査」を実施

August 25, 2016

アツヴィ、RSウイルス感染症で入院したことのある子どもの親を対象に

「RSウイルス感染症重症化による入院実態・意識調査」を実施

- ・ 普段健康な子どもでも油断できない、予想外のRSウイルス感染症による入院実態が明らかに
- ・ 初期症状から入院までは「1～2日」と半数以上、入院期間は「1週間程度」と約4割が回答、突然の入院が1週間まで及ぶことも浮き彫りに
- ・ RSウイルス感染症による入院は親の生活面にも広く影響、先々の子どもの健康面に対する懸念も示す

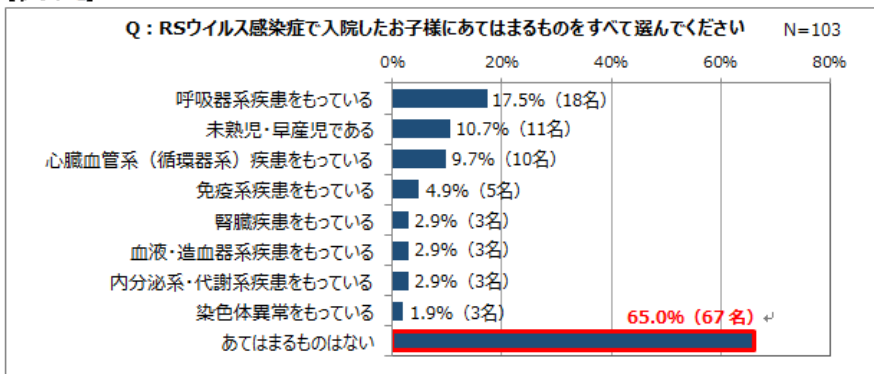
アツヴィ合同会社（本社：東京都港区、社長：ジェームス・フェリシアノ）は、本年7月、過去2年以内に、3歳未満の子どもが入院したことのある親103名（母親：77名、父親：26名）を対象に、「RSウイルス感染症重症化による入院実態・意識調査」を実施しました。

調査の結果は、以下の通りです。

【調査結果】

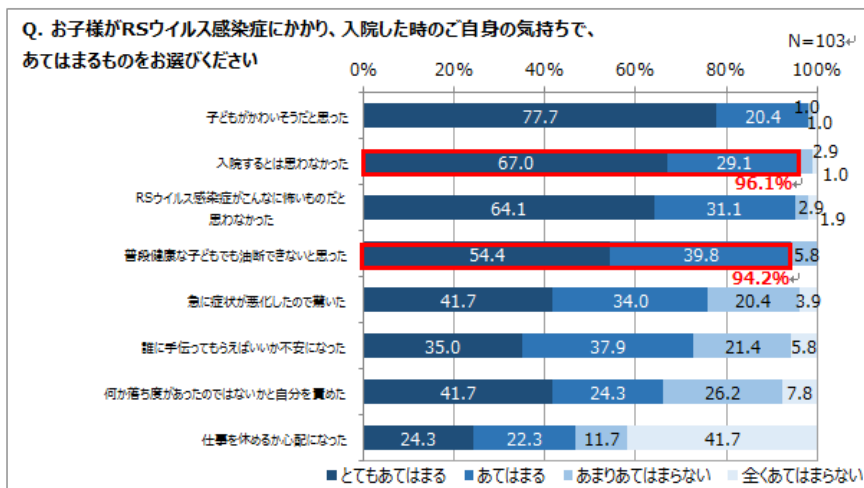
- ・ 普段健康な子どもでも油断できない、予想外のRSウイルス感染症による入院実態が明らかに
本調査において、RSウイルス感染症で入院したことのある子どもが、呼吸器系・心臓血管系（循環器系）疾患など「基礎疾患を持っている」あるいは「未熟児・早産児である」と答えた親は36名、基礎疾患を持たない健康な子どもの親は67名で6割以上を占めた。

【グラフ1】



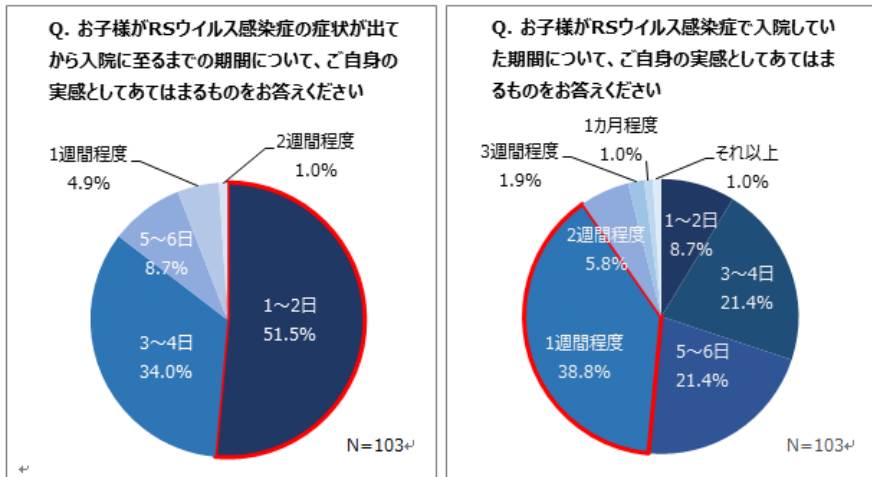
子どもが入院した親のうち、96.1%（「とてもあてはまる」「あてはまる」計）が、子どもが「入院するとは思わなかった」、94.2%（「とてもあてはまる」「あてはまる」計）が「普段健康な子どもでも油断できないと思った」と回答し、大多数がRSウイルス感染症による入院を予想外のこととして捉えていた。

【グラフ2】



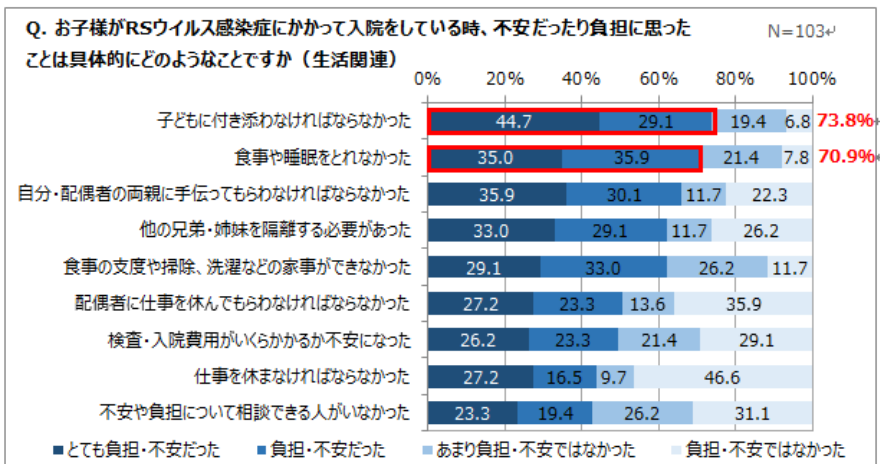
- 初期症状から入院までは「1~2日」と半数以上、入院期間は「1週間程度」と約4割が回答、突然の入院が1週間まで及ぶことも浮き彫りに
RSウイルス感染症の症状が出てから入院に至るまでの期間は「1~2日」が51.5%と半数を超え、入院していた期間は「1週間程度」が38.8%と約4割を占め最も多かった。

【グラフ 3】



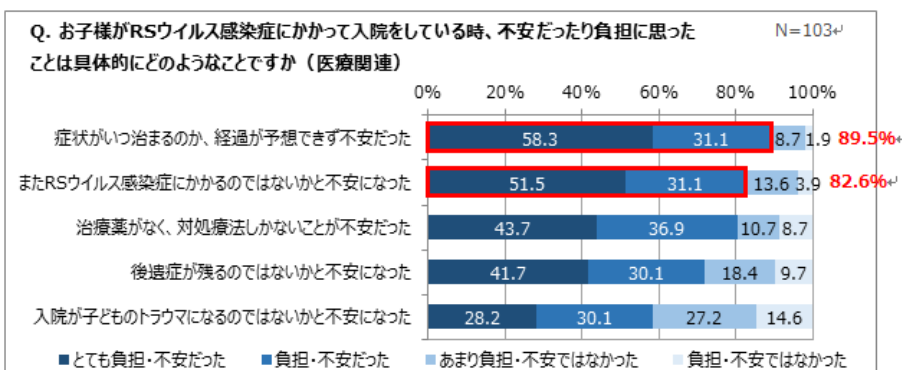
- RSウイルス感染症による入院は親の生活面にも広く影響、先々の子どもの健康面に対する懸念も示す
生活面において親が不安や負担に思ったことは「子どもに付き添わなければならなかった」が73.8%（「とても負担・不安だった」「負担・不安だった」計）、「食事や睡眠をとれなかった」（「とても負担・不安だった」「負担・不安だった」計）と回答した人が70.9%。

【グラフ 4】



医療面においては、「症状がいつ治まるのか、経過が予想できず不安だった」（「とても負担・不安だった」「負担・不安だった」計）が89.5%、「またRSウイルス感染症にかかるのではないかと不安になった」（「とても負担・不安だった」「負担・不安だった」計）と答えた人は82.6%で、先々の子どもの健康に対する懸念が示された。

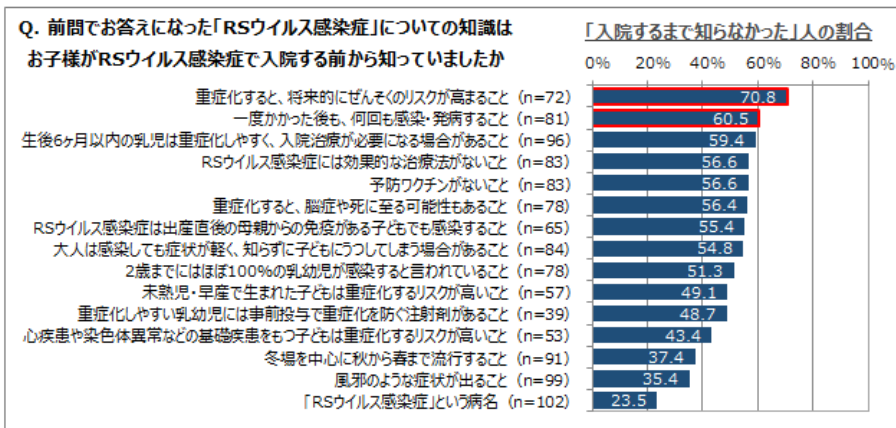
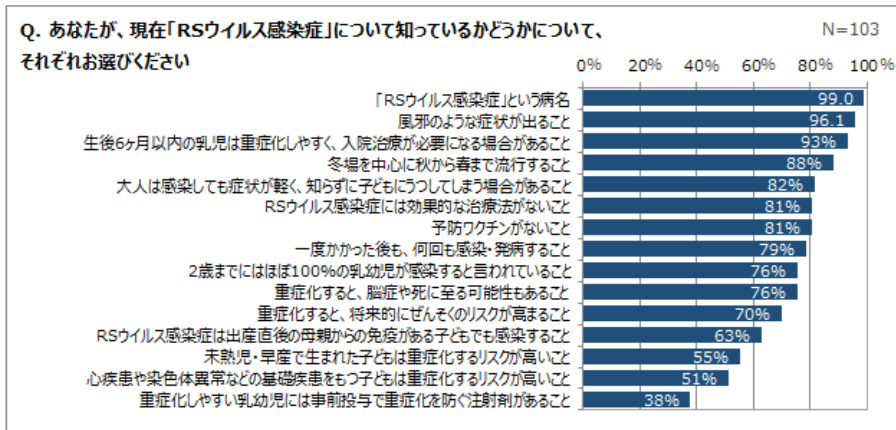
【グラフ 5】



- 子どもの入院後に得たRSウイルスに関する知識は、「重症化すると、将来的にぜんそくのリスクが高まること」が70.8%、「一度かかった後も、何回も感染・発病すること」と回答した親は60.5%

現在RSウイルス感染症に関して知っていることで、子どもが入院するまで知らなかったことについて訊いたところ、最も多い回答は「将来的なぜんそくリスク」、次に「何回も感染・発病すること」。

【グラフ 6】



これから本格的な流行期を迎えるRSウイルス感染症は、軽症の場合には鼻水、せき、微熱などの症状ですむ一方、重症化すると肺炎や細気管支炎などを引き起こし、入院に至るケースや最悪の場合には生命を脅かすこともあります¹。乳幼児の場合には、インフルエンザに関連した死亡者数に比べ、RSウイルスに関連した死亡者が多いというデータもあります²。特に生後6カ月未満の乳幼児や、早産児、心臓や肺に基礎疾患のある児、ダウン症の児は、重症化のリスクが高いといわれています。

今回の調査の監修者である東京都立小児総合医療センター からだの専門診療部(内科系) 感染症科 医長の堀越裕歩先生は「RSウイルス感染症は乳幼児期の入院原因のトップを占めるほど乳幼児にとって重大な感染症です。重症化リスクが低いと言われていた、いわゆる健康な子どもでも入院に至るケースがあり、今回の調査でもそれが示されました。また、RSウイルス感染症で入院を経験した子どもをもつ親の多くがRSウイルス感染症の重症化について事前に知識を持っておらず、「入院するとは思わなかった」と回答していることから、ご家族や周囲の大人たちがRSウイルス感染症について十分な知識を持つことが重要です。しっかりとした手洗いなど、家庭でできる適切な対策を日常的に行い、子どものみならず大人自身も自らの体調に気を配ることが子どもたちを感染症から守ることにつながります。」とコメントしています。

1 Meissner H, Welliver R, Chartrand S, et al. Immunoprophylaxis with palivizumab, a humanised respiratory syncytial virus monoclonal antibody, for prevention of respiratory syncytial virus infection in high risk infants: a consensus opinion. *Pediatric Infectious Disease Journal* 1999; 18: 223-231.

2 MHLW Q&A about RSV

調査概要

<調査対象者>

過去2年以内に、3歳未満の子どもがRSウイルス感染症により入院したことのある親103名

<調査手法>

オンライン調査

<調査時期>

2016年7月

<監修>

東京都立小児総合医療センター からだの専門診療部（内科系） 感染症科 医長

堀越 裕歩 先生

アッヴィについて

アッヴィは、アボットラボラトリーズからの分社を経て2013年に設立された、研究開発型のグローバルなバイオ医薬品企業です。専門知識や献身的な社員・イノベーション実現に向けた独自の手法を通じて、世界で最も複雑かつ深刻な疾患領域における先進的な治療薬を開発・提供することをミッションに掲げています。アッヴィは、100%子会社のファーマサイクリクス社を含めて世界で28,000人以上を雇用し、170カ国以上で医薬品を販売しています。当社の概要や人材・製品群・コミットメントに関する詳細はwww.abbvie.comをご覧ください。よろしければTwitterアカウント@AbbVieもフォローください。また、人材情報はFacebookやLinkedInページをご参照ください。

日本においては、アッヴィ合同会社の約1,000人の社員が、医療用医薬品の研究・開発や販売に従事しています。自己免疫疾患・新生児・肝疾患・ニューロサイエンスの各領域を中心に、患者さんの生活に大きく貢献できることを願っています。詳しくは、www.abbvie.co.jpをご覧ください。